

研究室紹介

富山県農林水産総合技術センター 園芸研究所 花き課

富山県農林水産総合技術センターは、農林水産業を巡る情勢の変化や多様化・高度化する県民ニーズに的確に対応するため、平成20年4月1日に農林水産関係の試験研究機関を統合して発足しました。園芸研究所は、当センターにおける野菜・花きの中核的研究所として、本県の園芸作物のブランド強化につながるチューリップ新品種の育成および野菜・花き類の生産技術等の開発に取り組んでいます。また、併設するチューリップ遺伝資源センターでは、遺伝資源として県育成の41品種を含む国内外のチューリップ約2,100品種を収集・保存し、その特性評価を行っています。

花き課のスタッフは、総括1名、病害担当2名、栽培担当1名、育種担当2名の計6名で、チューリップの育種および試験研究と、植物防疫に関する業務を行っています。

以下に現在進行中の病害虫関連の主な研究課題等について、簡単にご紹介します。

1 チューリップ球根腐敗病の実態調査

富山県のチューリップ球根生産現場において、チューリップ球根腐敗病の発生が増加しており、その原因の一つとして、球根消毒剤の薬効の低下が懸念されています。そこで、種々の球根消毒剤に対する薬剤耐性菌の発生状況を調査しています。その結果をもとに、薬剤の切り替えや処理方法について球根生産者への指導が行われています。

2 菌類媒介ウイルスに対するチューリップ抵抗性評価

長年、土壤伝染性ウイルス病害であるチューリップ微斑モザイク病と条斑病の発生が問題となっています。これまでの研究により、耕種的防除のなかで、抵抗性品種の利用が最も有効であることがわかっています。そこで、導入予定品種を中心に土壤伝染性ウイルス病の抵抗性について調査を行い、質の高い富山県品種の育成に役立てています。

3 主要な病害虫に対する薬剤効果試験

チューリップ球根栽培では、3月上旬ごろの萌芽期から6月上旬ごろの枯凋期まで褐色斑点病やウイルス病の



図-1 チューリップ遺伝資源品種保存圃



図-2 チューリップモザイクウイルス病の健全株（左）と罹病株（右）

媒介虫であるアブラムシ類などが防除の対象ですが、使用できる薬剤が少ないのが現状です。そこで新規登録農薬の拡充に向け、種々の薬剤の効果判定試験を行っています。また、最近では繁忙期に省力的かつ効率的に農薬を散布できるドローンを活用した病害虫防除法の普及に向けた高濃度少量散布について検証しています。

その他、チューリップの関連病害の予察や園芸作物、マイナー作物における新病害の診断や対策技術について生産現場と情報共有しつつ取り組んでいます。

一方、水田率が全国一高いといわれる本県における、「水田フル活用」による“収益性の高い園芸作物等の拡大・産地化”に向け、当所では露地小ギクを中心とした切り花や、タマネギ・ニンジン・加工用キャベツ等の栽培安定化・高収益化に向けた試験に取り組み、県農業の発展に寄与しています。

(副主幹研究員 牧野 徹)